動向 スウェーデンにおける知的障害児教育の教材の動向

サリネンれい子

1 はじめに

2021年の春学期も終わりに近づいた頃，スウェーデンでは，必要な教材を購入することができない教師が5人に1人，年間教材費が少ない学校は400 kr（約5,000円），多いところは1,500 kr（約18,000円）と，かなり差があるなどの問題が，教材著者の会より指摘され，教材について学校法に明示するべきであるという議論が湧き起こっていた．スウェーデンでは，1990年代に教科書・教材の審査が廃止され，教科書や教材選びは，各学校の校長の責任とされている．実際に選ぶのは職員や教師グループであるが，近年増えているICT教材に関しては，基礎自治体が一括して購入する場合も多い．知的障害児の大半が通う基礎特別支援学校（grundsärskola）[1]でも同様である．

PISAをはじめとする国際学力テストの結果が芳しくなかったことを受け，新しいカリキュラムの導入と共に教える内容の明確化，読み書き計算の早期支援，各教科の授業時間数の見直しなど，教育政策上，多くの対策が行われた．基礎特別支援学校でも，それまでの日常生活訓練を重視した内容から，家庭科や手仕事の授業時間数が削減され，算数やスウェーデン語の授業が増やされた．

2017年には，基礎特別支援学校の1年生には，スウェーデン語と第2言語のスウェーデン語，算数のアセスメント・評価を行うことが義務付けられ，国からそのための資料が出ている．基礎特別支援学校は，基礎学校に準じた11教科を学習する教科学習をするコースと，教科を5つの領域で学習する領域学習コースの2コース制となっているが，このアセスメント・評価は，両方のコースに義務付けられている．義務となってはいないが，算数とスウェーデン語の7～9年生の評価の資料も出ており，使用が推奨されている2018年には，それまで9年間でまとめられていたカリキュラムの内容が，1～3年，4～6年，7～9年[2]の3段階に分けられ，主要5教科においては，3年生終了段階での知識要件が加わった．

2 教材開発を行う国の機関，特別教育庁

スウェーデンには，学校庁（Skolverket）[3]のほかに，特別支援教育関係を管轄する国の行政庁として，特別教育庁（Specialpedagogiska skolmyndighet）がある．特別教育庁は，教材教具の開発と作成，そのアクセシビリティを高めることと，特別な支援を可能とする教材教具を広く国内で広めることを主目的の一つとしている行政省庁である．独自の教材教具を開発することはもちろんであるが，多くの生徒が利用しやすい教材教具を開発する教材会社の支援や援助も行っている．1980年代に盲学校が廃止[4]され，盲児は基礎学校で学んでいる．このため，盲児のための教材教具の開発や受け入れ学校の教員の支援や援助も行っている．スウェーデンの教員は教材「選択」を行い，それをもとに，どのように授業をするかを研究しているという印象を受ける．知的障害児や特別な支援や配慮を必要とする生徒のための教材教具は，学校形態や学年，教科や障害の種類などをもとに，特別教育庁のホームページで検索することができ，試し読みもできる．特別教育庁のものに限らず，国内の全ての教材教具を網羅しており，「こんな教材教具がほしい」という要望も常に受け付けている．コミュニケーション方法や点字などの講習会も定期的に行っており，幅広い支援が積極的に行われている．こうした継続的な教材開発と支援が行えるのは，国の機関であることが大きい．また，コロナ禍においては，いち早く，オンラインで使える教材の多くを無料で開放し，何らかの理由で登校が難しい児童生徒の学習に利用された．

サリネン レイコ
ストックホルム市公立基礎特別支援学校教員
ウプサラ大学教育科学部特別支援教育専攻修士課程在籍

3 文字を読んだり書いたりできない児童生徒の教材教具

基礎特別支援学校の教科学習コースのスウェーデン語の学習では「話したり会話したりする」「文章を読み，理解し考える」「様々な目的の文章を書く」「文学や演劇などの内容を考える」「情報リテラシー」の5つの能力を伸ばす機会を与えることとある．ここでは，特に文字を読んだり書いたりすることができない，苦手とする児童生徒のための教材教具を紹介する．スウェーデンの基礎特別支援学校では，文字を読んだり書いたりすることができるようになるかどうかが，教科学習か領域学習のどちらのコースで学ぶかの分かれ道にもなっている．3年生終了時点で，簡単な文章を読めることと，書き写しでも字が書けることが一つの目安となって，その後のコース選択に影響を与えている．また，読んだり書いたりできても，苦手意識を持っている生徒が多く見受けられ，「読むことや書くこと」が主目的となる授業内容でない場合は，文字を書かなくてもよい教材教具が使われることが多い．実際の教材を紹介する．

①物や写真が詰まったカバン「物から写真へ」

領域学習コースの生徒たちのコミュニケーションの授業で使われている代表的な教材である．知的障害児の多くは，学校教育が始まった段階でも，物という具体物を介して外の世界を理解し，コミュニケーションをとっている場合が多い．具体物から抽象物への第一歩として写真の理解を教えることを目的としたのが，この「物から写真へ」である（**写真1**）．2009年に開発されたこの赤い大きなカバンの中には，生徒たちが歯ブラシや櫛，コップといった日用品，おもちゃやクレヨンなどの実物と，それらのカラーと白黒の写真のカードが，解説書とともに入っている．様々な感覚を利用して学ぶことを考えられており，例えば，車の好きな生徒であれば，教師と生徒が向かい合って座り，車を見せて，触って，「ブルーンブルーン」と音を出して遊んでみるなどをした後に，車とフォークの写真カードを提示し，どちらが車かと聞く．手で取る子もいれば，指差しや目線など，答え方は生徒それぞれによって異なる．生徒が一瞬出す反応を見逃さず，正しい写真のほうに導くことを繰り返す中で，写真という抽象物の存在を教えていく．

写真1 特別教育庁の教材教具の展示
右下のカバンが「物から写真へ」の教材

カラーと白黒写真の両方を試すことで，どちらの方が，生徒にとって見やすく理解しやすいのかも確かめていく．こうして，物から写真，写真から絵カード，絵カードから文字へと，生徒の能力を最大限に伸ばしていく努力がされている．

②12と24のカードを使った「パリンとリッコ」

スウェーデンで，古くから使われている文字を使わない教材の代表が「Palin（パリン）」である．